

提出日：令和 3 年 3 月 1 日

所 属： 生命・環境科学部 食品生命科学科

氏 名： 澤野祥子 職位： 准教授

## I ティーチング・ポートフォリオ

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト(必修，選択)（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。

主に、食品の機能分野の科目を担当している。カリキュラムツリーの流れの中で、学生に専門知識を着実に定着させることを意識して授業を行っている。実習科目については、実験手技の向上はもちろんのこと、レポート・プレゼンテーションなどの発信力も磨けるようなシラバス作成を心掛けている。

※分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外）

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
フレッシューズセミナー	食品生命科学科	必	1年次	75名
食物アレルギー論	食品生命科学科	選	3年次	88名
応用栄養学	食品生命科学科	選	3年次	91名
食品学実習	食品生命科学科	必	2年次	76名
卒業論文	食品生命科学科	選	3,4年次	14名
アカデミック英語コミュニケーション	環境保健科学専攻	必	1年次	11名

### 2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

食品関連の知識を不足なく学生に定着させることを念頭に置いて教育業務を行っている。教育業務を行う際に目指していることは「自分の色を出しすぎない」ということである。例えば、私自身は骨格筋や味覚研究などのバックグラウンドを持っているが、授業内容にそれらのバックグラウンドを前面に押し出しすぎないように気を付けている。もちろんバックグラウンドを反映させた授業も14回のうち1,2回は応用として行うが、そちらが主になってしまうと教員によって同じ科目でも内容が全く異なったものになり代わりがきかなくなると考えている。誰が教えてもほぼ同等の内容が学生に教授されることが「麻布大学の教育」には重要であり、カリキュラムにのっとって必要な知識を楽しんで身につけさせられるような教授法を工夫することに重きを置いている。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

#### アクティブラーニングについての取組

座学については、15回の中で必ず1回以上はグループワークの時間をとるようにしている。既に習った単元の復習を兼ねて行っているが、他のメンバーとの知識の差が如実に表れるので、それぞれの学生にとって良い刺激になると考えている。また、授業が一方通行にならないよう、授業の後半では該当回の内容を振り返る確認問題を解く時間を設け、答え合わせと解説を毎回実施している。その問題は次の週に、小テストとして出題し、スモールステップで知識の確認と蓄積ができるよう工夫をしている。

実習については、実験結果をまとめて発表する機会を必ず設けている。実験は手を動かすことも大事だが、それと同等にデータを正確に整理して結果を示し、結果から考えられることを導

<p>き出す能力が必要だと考える。したがって、実験以外のレポート作成やスライドプレゼンテーション作成も手厚く授業の中でフォローするように意識している。</p>
<p><u>ICT の教育への活用</u></p> <p>學理を活用し、出欠、小テスト、課題を実施している。また実習のレポート・スライド作成課題も學理での提出を去年度から実施している。本年度はコロナ禍で遠隔授業を余儀なくされたため、授業の動画作成や実習の動画撮影・編集も含め、學理と Google ドライブを毎回活用した。今後も ICT 教育の有用なところは残しながら授業運営をしていきたい。</p>
<p>4. 教育方法の改善の取組 (授業改善の活動)</p>
<p>1 <u>教育 (授業, 実習) の創意工夫 (A~C)</u> B</p> <p>2 <u>学生の理解度の把握 (A~C)</u> A</p> <p>3 <u>学生の自学自習を促すための工夫 (A~C)</u> B</p> <p>4 <u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A~C)</u> B</p> <p>5 <u>双方向授業への工夫 (A~C)</u> B</p> <p>※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)</p> <p>上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。</p> <p>80-90 名規模の授業が主なため、日頃の授業で、学生とのコミュニケーションを十分に取れていないと感じる。以前、プリント形式で小テストを行っていた際には、小テストの最後にコメント欄を設けて、学生が自由に質問や意見を記載できるようにして双方向性を担保していた。しかしながら、実施してみた結果、授業と全く関係のない不適切なことを書いてくる学生が出てきたためこのやり方は中止した。今年度はオンライン実施であったため、メールなどの媒体で質問をしてくる学生が若干いたが、対面でもメールあるいは直接質問をしやすい雰囲気を作る必要があると考えている。</p> <p>自学自習については、大体の授業で小テストを毎回課しているため、自宅や授業前の復習がしやすい状況になっているようだ。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>1 <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>授業評価で好評だった点は続け、不評だった点は改善を試みている。例えば「分かりやすい」というコメントについては「十分理解できている」と捉え、単元の難易度を据え置いている。「字が小さくて見にくい」という意見については、パワーポイントのフォントを 20 pt 以上にしたり、字が小さい資料は別途、配布資料にするなどの工夫をしている。</p> <p>実習については、「滴定が多い」という意見があったので、2 回の滴定実習を 1 回に変更した。</p> <p>2 <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>今年度は遠隔授業だったこともあり、「字が小さい」というコメントはゼロになった。フォントの工夫以前に、対面と違って場所による見にくさがなくなったためだと考えられる。</p> <p>3 <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>学生に好評だった点を意識して、次年度の対面・オンライン混合授業に活かしていきたい。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>1 <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>授業の終わりに、学習した内容のまとめ問題を解いてもらい、模範解答を解説することで、その日の授業のダイジェストを簡単に行う。翌週の授業の始めに、前週行ったまとめ問題と同じ問題を用いて、小テストを行う。毎週少しずつ覚えていくので、記憶の定着が図れる。また、小テストの採点は教員自身が行うため、どこでどのくらい理解できているかの把握ができ、間違いが多かった問題については、詳しく解説するなどの対応ができる。</p> <p>2 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>「分かりやすかった」、「ためになった」などの学生の声を得ている。</p>

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

可能な限りFD研究会には参加するようにしている。予定がある、もしくは遅い時間帯に実施されるFD研究会については、オンタイムで参加できないものの、後で映像を見て参加することで補填している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

双方向性や学生とのコミュニケーションといった点が自身の弱い点でもあるため、今後はそれらを意識した授業づくり、教育活動を行っていきたい。具体的には、小さいことではあるが、授業担当科目を履修している学生の顔と名前を全て一致させることから取り組んでいこうと考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ